

# カーネギーホールとナショナル・ユースオーケストラ USA

## 小林 伸太郎

### カーネギーホールとは何か

「カーネギーホールにはどうやって行けばいいのですか？（How do you get to Carnegie Hall?）」という質問に対して、ピアニストのアルトゥール・ルービンシュタインは「練習、練習、練習！（Practice, Practice, Practice!）」と答えたという。この逸話には、ルービンシュタインの代わりにヴァイオリニストのヤッシャ・ハイフェッツや名も無いタクシー運転手が答えるなど、様々なヴァージョンがある。本当にこんな対話があったのか、その真偽のほどは甚だ疑わしいのだが、カーネギーホール主催の演奏会に招かれて演奏することが一流の証ともいわれる、このホールならではの愛すべきジョークであることは確かだ。

鉄鋼王アンドリュー・カーネギー（1835～1919）によって、アメリカの文化的生活を高め、質の高い音楽へのアクセスを民主化する場として構想されたカーネギーホール。1891年、こけら落としの演奏会にはチャイコフスキーが指揮者の一人として迎えられ、以来、その素晴らしい音響、エレガントな建築とともに、世界トップクラスの演奏家による高いスタンダードのパフォーマンスを提供し続けてきた。ブルーノ・ワルターの土壇場の代役として彗星の如く登場したレナード・バーンスタインのニューヨーク・フィル・デビューコンサートのようなクラシック音楽の演奏会はもちろんのこと、ベニー・グッドマンやビートルズ、ジュディ・ガーランド、ボブ・ディランなど、様々なジャンルのアーティストによる数々の名演奏が、ニューヨークを世界的な都市とすることに貢献してきたのだ。

### 音楽の未来を育む



カーネギーホール

©Jeff Goldberg/Esto

そんなカーネギーホールであるから、彼らのミッション・ステートメント（活動指針）に「卓越した音楽と音楽家を紹介すること、音楽が持つ変革的な力をできる限り多くの人々に届けること」という文言が含まれていることに驚く人はいないだろう。年間公演数は、大中小3つのホール合わせて200近くに上るといい、それだけでも大抵の人は十分だと思うだろう。



ナショナル・ユースオーケストラ USA

©Chris Lee

しかしカーネギーホールはそこにとどまらない。「先見的な教育プログラムを提供すること、そして新しい作品、アーティスト、観客を育成することで音楽の未来を育むこと」というミッションに導かれて、様々な教育的取り組み、アウトリーチ活動でも幅広く一般社会に貢献しているのだ。

2005年以来、カーネギーホールの総支配人兼芸術監督を務めるクライヴ・ギリンソン氏は、カーネギーホールのような組織は「何が我々にとってベストであるか？」ではなく、「音楽を通じて人々の人生に我々が与える影響として、何がベストであるか？」と問わなくてはならないと、全米芸術基金によるインタビューで語っている。より多くの人々にとってベストな活動は、カーネギーホールにとってもベストというわけだ。組織がそのような考え方をすると、その活動は自然と外向きに開かれていくという。

カーネギーホールが展開する膨大な教育活動や社会貢献プログラムは、カーネギーホールが持つ3つのホールはもちろんのこと、学校、刑務所のような矯正施設、美術館その他の団体とのコラボなど、ニューヨーク市全域、全米、そして世界の様々な場所で展開され、毎年数十万人もの人々にリーチしているという。とりわけ近年は、多様性（Diversity）、公平性（Equity）、包括性（Inclusion）、アクセシビリティ（Accessibility）を価値の中心に据えたプログラムに力が入れられている。実際、「音楽の殿堂」としての名声に溺れることなく、未来を見据えた彼らの積極的な活動には、目を見張るものがある。

ちなみにカーネギーホールは、新作委嘱も定期的に行っている。ホール創立125周年を迎えた2015年には、新作125作品を著名あるいは新進の作曲家に委嘱するプロジェクトを立ち上げ、2019～2020年に完結させたことは、記憶に新しい。

### なぜカーネギーホールがユースオーケストラを主催するのか？

今回、初来日を果たすナショナル・ユースオーケストラ USA（NYO-USA）も、このようなカーネギーホールの姿勢を知れば、なぜカーネギーホールが手がけることになったか、理解しやすいのではないだろうか。



ナショナル・ユースオーケストラ USA

©Chris Lee

もともとチェリストであったギリンソン氏は、16歳から3シーズン、英国のナショナル・ユースオーケストラに所属した経験をお持ちだ。全英から選ばれた才能ある青少年との交流は、その後の人生に大きな影響を与えたという。

米国には、その歴史を20世紀初頭にさかのぼるといって、オール・ステートオーケストラという青少年向けのオーケストラが、ほぼ全米各州に存在する。しかしそのレベルは

州によって非常にばらつきがあるとのことで、必ずしも全ての青少年にとってインスパイアされる経験を提供する訳ではないようだ。

カーネギーホールに就任したばかりのギリンソン氏は、米国に全国規模のユースオーケストラがないことに驚き、就任後の最初の目標の一つとして、NYO-USAの設立を構想したという。全米から優れた才能を持つ青少年を集めるというアイデアは、当初から関係者の多くから賛同を得た。しかし、毎年100人以上のユースに集中トレーニングと演奏ツアーの機会を無料で提供するという大規模なプロジェクトの実現は、さすがに容易ではなかったようだ。第1回の開催は2013年、ギリンソン氏就任から8年後のことだった。

### カーネギーホールがユースオーケストラを組織する上で持つ優位性

ところでニューヨークの地元オーケストラ、ニューヨーク・フィルが、かつてカーネギーホールを本拠地としていたことは、みなさんご存知だろうか？ 1962年にリンカーンセンターにニューヨーク・フィルが移って以来、カーネギーホールは、常設のいわゆるレジデント・オーケストラを持たなくなった。つまり、常勤の音楽監督も、プレーヤーも、カーネギーホールには存在しないわけだ。

この状況をギリンソン氏は、なんの制約もない、自由にアイデアを形にできる環境をカーネギーホールに与えるとして、むしろ積極的に捉えている。レジデント・オーケストラがあれば、プログラムの中心はどうしてもそのオーケストラになる。それにはもちろんポジティブな要因も多いが、制約となり得ることも事実だ。

そしてカーネギーホールには、その歴史が築いてきた国際的な名声と知名度がある。NYO-USAが発足当初からワレリー・ゲルギエフ、マイケル・ティルソン・トーマス、アントニオ・パッパーノなどの著名指揮者、様々な著名ゲスト・ソリスト、そして教授陣としてニューヨーク・フィルやシカゴ交響楽団、クリーヴランド管弦楽団など、トップクラスのオーケストラの首席奏者を数多く招聘できたのも、カーネギーホールが長年築き上げた音楽家との信頼関係があればこそだろう。ギリンソン氏の言葉を借りると、「誰もがカーネギーホールに関わることを望んでいる」のだ。

初めてNYO-USAの演奏を聴きにカーネギーホールを訪れた時、私はまずステージから会場に発せられるポジティブなエネルギーに感動したことを覚えている。お揃いのジャケットにスニーカーも素敵だが、彼らの何人かが演奏前にちょっと観客に向けて話しかける際の、堂々と自信に満ちた姿にも驚かされた。ギリンソン氏は彼らの演奏を「目を閉じればユースオーケストラとは思えない、プロのような優れた演奏」と賞賛する。さらに言えば、まるで明日はないかのように演奏する彼らの情熱は、プロからは決して得られない、16歳から19歳に限られたユースオーケストラならではのものだろう。全米から集められた実力者ばかりの彼らが、それまで経験したことがなかったであろう、自分の年齢に近い実力者ばかりの集団の中で、お互いをインスパイアしあったことは、想像に難くない。



©Chris Lee

カーネギーホールとサントリーホールは、2006年にパートナーシップを締結し、音楽教育や国際的な文化交流を軸に、様々な共同プロジェクトを展開している。今回のNYO-USA来日は、その最大規模のものとなるのだろう。こうして考察してみると、二つのホールの共通点も見えてくるようだ。

発足からまだ10年余りのNYO-USAだが、既に100人以上の卒業生が世界各地のオーケストラやアンサンブルで活躍しており、なかには首席奏者として名を連ねる者も少なくない。カーネギーホールの2025-26年シーズンは、そんな彼らを集めたオーケストラ、NYO-USAオールスターズによるガラ・コンサートで開幕する。

彼らのポジティブなエネルギーが日本でどのように炸裂するのか、大いに期待される。

(こばやし しんたろう・音楽ジャーナリスト／ニューヨーク在住)